昭和二十三年

春宵や花購う妻と並び佇つ

虫おこし山蒻に雨かわき初む

炭馬にくゝりし独活の一たばね

春昼や隣畑と高話

再び雲母へ投句を初む

夕つづや春祭畢る大幟

雪晴れの蒼穹にひびきて獅子の笛

荒ぶ日の花粉を空へ松大樹

中巨摩郡高尾山稲見神社

松の花八つ棟づくりという神楽殿

軒菖蒲巣ぐみの乙鳥くぐりくる

朝嵐しづまり垂るる軒菖蒲

翔(タ)ち光る風の穂麦の夕ひばり

乙鳥嬉々と穂麦に腹をこすりとぶ

花柿の虫去り遅き夕べあり

アルプスの襞雪細り芽桑解く

南下條所見

苗代の雨に芍薬影しづか

蟻通う梨の端枝の雨蛙

舞鶴城

壕水に皺をたたみて松花粉

花茱萸にキラくまはる換気筒

小麦花散る濡れ土に甘藷根づく

シビビーの桑畑がかり遠ざかる

稚蚕室出て花桐のすがくし

袋掛け漸く暑き日にうみて

雨意こめて瓜ばえ土を這いづれり

五月九日日蝕

蝕甚やふとききとむる夏ひばり

水盤に欠け日輪と柿若葉

復円す日ざしはとみに夏めける

五月二十五日　三男良知誕生

大火焚き産声を待つ五月の爐

薄暑光障子にみづこよく眠る　（暑？）

娘の汗の香のかぐわしき袋掛け

初夏の荒雨たたく蕗大葉

虹の脚明るく麦は黄熟す

大土間の朝冷えに鳴くつばくらめ

熟れ麦にこもりて灯すほたるかな

痩せ桑の古実をこぼす土灼けぬ

蚕やぐらをひらひら渡る大百足

花柿を群るる蜂はや明け易き

花栗に梅雨入りの雲のうつとあり

昼寝覚め淋しき夏至の日雨かな

田植はつ空の眞澄に真夏来ぬ

苗すゝぐ堰満々と朝日満つ

泳ぎ子の炎天もどる唇(クチ)褪せて

短夜や桶の山百合開き初む

藤垈の滝

龍神の幣をあほつ滝しぶき

天王社祭典

青柿に祭提灯灯ともりぬ

片倉製糸所見

バラ垣に青春の歌寮は夏

昼蚊帳の一すみ外し暑気当り

今年藤井田圃に誘蛾燈設置

蛙(ア)声更け地平の星と誘蛾燈

畦豆の花ほつほつと土用明け

白蓮の花清麗に朝曇り

褪せそめし田づら秋立つ風白し

盆の月桑の高枝にスイト鳴く

芥焼く煙墓山に盆仕度

踊りの輪遠くしづもる兵の墓所

盆礼や草深き灯をめあてにて

遺母独り蠅と盆供侘びしがり

百姓になれて土俗の盆踊り

かりそめに病みて花卉透く秋蚊帳に

くさぎらぬ畑草は実に茗荷咲く

良知百日の祝

新涼や子に据え祝う百日膳

山の童に長き夏ゆく法師蝉

日は閑か澄みてかさ減る出水川

帰燕とびみどり児の瞳のすずやかに

秋繭える身に添う影とありにけり

紫蘇は実に土に影してあきつとぶ

新涼や掌にして小さき初卵

おのが影だきしむるかに秋の蠅

寒風呂に老いさらばえし身を沈む

昭和二十三年晩秋より冬へ

東大

醫学部へ大学の道黄落す

赤門は固く鎖されて秋落暉

この秋東京裁判判決下る車中にてきく

灯る汽車悼む心に枯野ゆく

裁かれし人秋逝くこころかな